兵庫県立大学環境人間学部　研究報告第13号（2011年）

コールリッジにおける‘Surinam Toad’のメタファー

石　倉　和　佳

人間環境部門

Coleridge's Use of 'Surinam Toads' as a Metaphor

Waka ISHIKURA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092　Japan
ishikura@shse.u-hyogo.ac.jp

Abstract

The aim of this paper is to explore Coleridge's use of 'Surinam toads' as a metaphor in his various writings and evaluate his metaphorical thinking. 'Surinam toads' are large toads found in the Guiana region, and which hatch their eggs on the back of the female toads. In the eighteenth and nineteenth centuries, they were often cited in encyclopaedias and books on natural histories. The toads are also described in John Stedman's *Narrative of a Five Years Expedition against the Revolted Negroes of Surinam,* which Coleridge read in the 1790s. The name 'Surinam' implied colonial traffic as it had originally been a Dutch colony and later became a British colony during the Napoleonic Wars. The toads thus acquired rich implications, and Coleridge began to consider them as pertinent for metaphors, and using them to make references to extraordinary productivity and absurdity. In this paper, I examine Coleridge's metaphorical use of the toads by exploring the followings: William Pitt's Window Tax accompanying other taxes similar to how a Surinam toad carries its toadlets on its back: Coleridge's thinking germinating various thoughts peculiarly resembling a Surinam toad producing its toadlets at a time: atomic theories degenerating themselves by inviting other theories in a manner similar to how a Surinam toad delivers: the 'Roman Catholic Emancipation Act' stimulating other emancipation causes, a phenomenon similar to the productivity process of a Surinam toad. By examining these metaphors, I argue that metaphors are powerful in their functions of grasping complex ideas and concepts and developing them, and Coleridge's use of metaphors in this case strongly suggests that metaphors should be taken into consideration in scientific logical thinking.

１．はじめに―‘Surinam toad’のメタファーを考察する意義

文学的修辞においてメタファーが重要な役割を果たすことは言うまでもないが、一人の詩人が自らの思考の展開とともにメタファーの含意や応用範囲を変化させていくことは、修辞の問題以上に思想的な意味を持つ[1]。サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）には独自のメタファーが多くある[2]。本稿ではその中で、‘Surinam toad’[3]のメタファーについて考察する。‘Surinam toad’は、南アメリカ北部、熱帯のギアナ地方（スリナムを含む）に生息する大型のカエルである。このカエルを用いたメタファーをコールリッジは多く書き残しているが、よく知られているものとしては彼自身が出版した定期刊行物『友』（*The*

Friend, 1809, December 7; *Friend,* 2:212）の中に宰相ウィリアム・ピットが導入した‘Window Tax’を記述するに際して登場するものがある。この文章はのちに『文学的自叙伝』（*Biographia Literaria,* 1817; *BL,* 2: 178）にも採録されたため、広く読まれることとなった。このメタファーはコールリッジが晩年まで好んで用いたものであるが、歴史的コンテキストや対象となる事物の実際を熟知しなければ趣旨がつかみにくく、文学研究の中で詳細に検討されることは少ない[4]。

このメタファーについて考察することは、コールリッジのテキストの理解およびテキストの持つ歴史性への視野の形成に寄与するものと考えられる。それに加えて、コールリッジの哲学的思考におけるメタファーの機能を評価することにもつながるだろう。Mark Johnson は、抽象的な思考によって理論を組み立てていく時、その思考の基本となる概念はメタファーを基本に構築されていると指摘している（“Philosophy’s Debt to Metaphor,” Gibbs, 39-52)。科学的な考察に付随する抽象的思考の根底に、メタファーによる概念把握の働きを見ているのである。文学研究においては、メタファーは文飾として捉えられ、科学や論理との関連から取り上げられることは少ない。一方で、科学的論述においては、言語の指示するものは客観的世界に直接的な相関物があるものと考えるのが前提であるため、科学的論述にメタファーを使うことは普通ない[5]。しかし、メタファーを科学的記述の文章上の表現から除外したとしても、メタファーが人間の言語活動における一つの機能であるならば、科学的真理を導き出すための思考の回路を形成するもののひとつである。であれば、最終的には比喩表現を含まない文章によって記述されたとしても、多くの科学的概念がメタファーを介する抽象的な哲学的思索によって生み出されているということになる。

Johnsonが抽象的思考におけるメタファーの重要性を説くのに対して、メタファーに抽象的思考への関与を見ないという前提に立った議論も多くなされてきた。Donald Davidsonはメタファーが意味を伝達するものではなく、メタファーの理解も意味の認識を伴わないものであると考えている（“What Metaphors Mean,” Sacks, 29-45)。John Searleは語用論の観点からメタファーを機能的にとらえ、二つの事項の間に連想的に連結を見出す認識のプロセスに言及しているが、その抽象化の力について深く掘り下げてはいない（“Metaphor,” *Expression and Meaning,* 76-116; Cf. Gibbs, 46-47)。このようなDavidson やSearleの議論は影響力の強いものであったため、結果としてメタファーの科学的思考における重要性を看過する結果ともなっている。このように、一般的にメタファーの機能として人間の抽象的な思考に何らかの働きをしていることを指摘し得ても、思想的、科学的な論述においてメタファーを主要な要素として取り上げることは理論上からも異論が多いのが現状である。

そしてこの状況は、コールリッジの哲学的思考を理解し、評価する際にも影響していると考えられる。メタファーの形成とそれによる理解が認識プロセスにどれほど関与するかといえば、ほとんどそれとは気づかれないほどに日常的になった表現様式やそれに付随する思考様式の中に隠れている場合が多い。しかし、コールリッジのテキストにおいては、メタファーはその修辞としての存在を強く主張しながら、かつ思考の中心的概念を担うものとして機能しているのである。メタファーを文飾として考えるべきなのか、そこに哲学的重要性はないのか、といった点は、コールリッジのテキストを理解しようとする際に課題となる点であろう。また、コールリッジの使用する独自のメタファーにおいては、事物に関する情報とともに連想によってつながりうる意味の範囲も大きい。文飾としてのメタファーとしてのみ捉えても、その情報量の多さは特徴的である。そして、そのようなメタファーの使用の中心に、抽象化して複雑な物事を把握しようとする論理化の志向も見られるのである。総じて言えば、抽象的概念把握によって論理的な思考を展開するとき、メタファーが重要な機能を持つと考えれば、コールリッジのテキストに見られる、ある意味では過剰なメタファーの使用も、文飾という以上に哲学的産物として考察することができるだろう。

以上をふまえて、以下、コールリッジの‘Surinam toad’のメタファーについて順次考察したい。

2．ロマン主義期における‘Surinam toad’

スリナムの名とともに有名になった‘Surinam toad’をコールリッジがメタファーに使うとき、その含意を知るためには時代背景とともに理解する必要がある。そこで、このカエルがどのような生態を持った生物であるか、およびコールリッジの時代にはどのように知られていたのかについて整理しておきたい。‘Surinam toad’はその珍しい繁殖形態とともに、18世紀からビュフォンの『博物誌』やリンネの動植物の辞典などで取り上げられた[6]。この生物は、北アメリカのギアナ一帯の川の中に生息するもので、現地ではピパ（Pipa）と呼ばれるが、英語圏では‘Surinam toad’というギアナ中部のスリナムの地名のついた名で定着した[7]。大きさは10cmから20cm程度で、体は非常に平たく、一生を水の中で過ごす。繁殖期には、メスが生み出す卵をオスが集め、柔ら

かくなったメスの背中に埋め込むという共同作業を行う。ゼリー状に近いメスの背中に埋まったまま卵は孵化し、幼生はそのまま変態過程を経て成体となったときに外に出る。成体となった子ガエルが次々と母カエルの背中から飛び出すのである。あとで詳しく考察するが、コールリッジはこのカエルの生態を知り、親（もしくは主体となるもの）の注意の届かないところで次々と生み出されるような物事や、不条理さえ思わせる過剰な産出を意味するものに対して比喩として用いた[8]。

'Surinam toad' がコールリッジの言説にあらわれたのは、珍しい生物に対する博物学的な関心のみならず、この時代のギアナ地方の植民地経営に関する関心が関連することが考えられる。スリナムを含む南米北部のギアナ地方は、フランス、オランダ、イギリスの三国によって次々と植民地化された。スリナムは、古くからオランダが植民地として開発した地域で、オランダ人は現地の黒人を奴隷としてプランテーションを作り、砂糖、コーヒー、ココア、綿などを生産した。それらの原材料は加工され嗜好品となりイギリス人にも消費されていた。オランダ人による植民地支配の過酷さから逃亡した奴隷たちは各地で一団を作り反抗するようになった。ジョン・ステッドマン（John Stedman, 1744-1797）は、1772年から5年間にわたるスリナムでのオランダ軍将校としての経験を、*Narrative of a Five Years Expedition against the Revolted Negroes of Surinam*（1796）としてロンドンで出版したが、この本は出版と同時に話題となり、1790年代の奴隷貿易反対運動の推進者たちに奴隷貿易の非人間性を示すものとして受け入れられた。ステッドマンはこの本の中で、現地人反乱に対する部隊と、黒人たちの様子や、スリナムの日常を描いたが、その中に 'Surinam toad' の描写も登場している。ステッドマンの描く 'Surinam toad' は、眠れぬ夜に上官の大いびきとともに川面に鳴り響く轟音のような鳴き声の主であり、「地上のあらゆる生物の中で最もぞっとする」（"the most hideous of all creatures upon earth," Stedman, 1: 270）ものとして紹介されている[9]。コールリッジや、友人のロバート・サウジー（Robert Southey, 1774-1843）、ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）などはすべて奴隷貿易反対の立場であり、スリナムという土地はステッドマンによって彼らに馴染みの地名となったと考えられる[10]。

コールリッジのテキストを理解しようとするとき、当時の時代的コンテキストを含めて 'Surinam toad' にどれほどの意味のポテンシャルがありえたのかを念頭におく必要がある。そして、このメタファーの中に、比喩というカテゴリーでは括ることのできない、批判的精神を読み取ることも可能だろう。以下、コールリッジの 'Surinam toad' のメタファーを具体的に検討していきたい。

3．1808年のコールリッジ

現存しているコールリッジのテキストの中で、おそらく最も早い時期に書かれた 'Surinam toad' のメタファーは、1808年4月の友人のウィリアム・サザビー（William Sotheby, 1757-1833）への手紙の中に登場する[11]。1808年、コールリッジは1月から王立研究所で文芸講演を行っていた。これは友人で王立研究所の教授となっていたハンフリー・デイビー（Humphry Davy, 1778-1829）の強い勧めによって実現に至ったものである。コールリッジには1795年にブリストルで奴隷貿易反対の講演と宗教的講演を行い、その後いくつかのユニテリアン教会で説教をおこなった経験がある。その間、定期刊行物の『夜警』（*The Watchman*）を発行し、詩集を出している。しかしその後は、モーニング・ポスト紙に記事を書く他は、表だった社会的活動をほとんどしていない。1808年に王立協会で講演を行うことは、久しぶりに公的な場に姿を現すということであった。

とはいえ当初は体調の不良のため、毎週の連続公演の予定が、3月までの間に3回の講演しかできない状況で、4月になってやっと定期的に演壇に登った。サザビー宛ての手紙は、連続公演が軌道に乗った期間中に書かれたものである。コールリッジは、自分の思考はスリナムのカエルのようだ、と次のように書く[12]。

I said, I was anxious of your Esteem; but my Thoughts are like Surinam Toads－as they crawl on, little Toads vegetate out from back & side, grow quickly, & draw off the attention from the mother Toad—. Now then straight forward—（*CL*, 3:94-95）

私はあなたの称賛をとても欲しいと思っていると言いましたね。けれども私の思考はスリナムのカエルのようなのです。這いながら進むにつれ、小さな子どもガエルが背中から脇から生え出でて、またたく間に成長し、母ガエルの注意から離れるのです。さてそれからまっすぐ進み始める‥。[13]

コールリッジは、今現在の自分の思考というのは、自分が考えていることであるにも拘わらず、まるで背中から勝手に湧き出して知らない方向に自分で歩きだしていってしまうようだ、と言っている。少なくとも現存するテキストの中で、自分の思考をこのカエルの繁殖にたとえているのはこの時期以外にない。このメタファーとは別

に、コールリッジは、自分がダチョウのように卵を産んでも忘れてしまうほど不注意だ、と繰り返し書き残しているのであるが[14]、‘Surinam toad’のメタファーとこのダチョウのメタファーとは異なったものである。ダチョウが卵を産んで忘れるという状態と、子どもが背中から湧き出るようにつぎつぎ生み出されるという状態とは違う。ダチョウのメタファーの焦点が卵を産む行為よりも、産んだあとの忘れやすさ（“oblivion”）にあるとすれば、後者‘Surinam toad’によるものは、産む行為そのものが意味の重点を担っている。そこには「産卵」と考えればあり得ない状況と生産力の過剰さが示唆されている。

このような状況を、いささか自虐的に自分のこととして記す背景のひとつには、なかなか軌道にのらなかった連続文芸講演に加えて、さまざまな仕事の企画を考えていたことが考えられる[15]。またそれ以上に、なぜこの生物がメタファーとして登場するのかという点については、トマス・クラークソン（Thomas Clarkson, 1760-1846）の*History of the Abolition of the Slave Trade*（1808）の出版を受けて書評を書くことを考えていたことと何らかの関連があると見るのが自然である。クラークソンは1790年代の奴隷貿易反対運動の牽引者であり、健康を理由に湖水地方に隠遁してからは、ワーズワス兄妹とも親しく交流した。コールリッジもクラークソンをよく知り、書評の執筆者となることについて打診された可能性がある。前年の1807年には奴隷貿易廃止の法案が可決され、クラークソンの本は時宜を得たものであった。3月に書かれたクラークソン宛ての書簡によれば、コールリッジは自分も人道的見地からの奴隷貿易反対については講演などをしてきたが、より影響力があったのは、奴隷貿易反対についての12のソネットを書いたサウジーであると述べている（*CL*, 3: 684）。これは、書評はサウジーが書いても良いのではないかという示唆ともとれる。しかしそのような経緯があったものの、5月には『エディンバラ評論』（*The Edinburgh Review*）の編集長のフランシス・ジェフェリー（Francis Jeffery）に、クラークソンの本の書評を執筆したい旨の書簡を送り（*CL*, 3: 116-17）、7月には原稿を編集部に送った（*CL*, 3: 118-19）。

コールリッジの1808年の文芸講演は、それ以後10年ほど続けて行われる一連の文芸・哲学講演の初めとなるものであり、特にシェイクスピア批評は後世に多大な影響を与えることとなった。この文芸批評が、非政治的なスタンスによって歴史的なコンテキストからは自律したテキストの価値を称揚するものであるのに対して、クラークソンの著作は奴隷貿易廃止という人道的、かつ時代の政治の中でその実現が遂行された事項を取り扱っているものであり、非常に対照的である。サザビーから称賛をもらいたい、というコールリッジの言葉は、自分の文芸批評の内容に共感してもらえれば嬉しい、といった意味にもとれるが、‘Surinam toad’のメタファーの使用は、そのことだけを考えてはいられない自分の状態を非常に屈折した表現で伝えているとも考えられる。そして‘Surinam toad’が登場するところに、スリナムやステッドマンの著作が思い出されたということが推測される。コールリッジのスリナムに関する知識の多くは、ステッドマンの著作からのものであると考えられるが、その土地の生物は、原住民の人々も含めて、コールリッジには未知であり、あるときは驚くべきものであった[16]。奴隷貿易廃止を受けた形で出版されたクラークソンの本にある奴隷貿易の歴史とともに、コールリッジの頭の中には、シェイクスピアと‘Surinam toad’が共存していたのである。

コールリッジのこの書評について付言すれば、ワーズワス、サウジーなどコールリッジの友人達の作品が『エディンバラ評論』で酷評を受けていたことを考えると、このホィッグ系のラディカルな書評誌にコールリッジが寄稿したことは注目に値する。のちに自身の『文学的自叙伝』が出版されたとき、エディンバラ評論での作者コールリッジへの酷評は群を抜いていた[17]。クラークソンの書評執筆は、コールリッジにとって書評誌の党派心のはざまの泥沼に一歩踏み込むようなことであった。多くの政治的対立者たちが、奴隷貿易廃止の大義という同じ目的に向かって共同した、と理想のシナリオ実現の実例として法案成立に言及するコールリッジの書評は[18]、書評誌の党派心の前にはアイロニカルに響く。

4．‘Surinam toad’のメタファー

次には、‘Surinam toad’のメタファーが使われた例として、1809年12月7日の『友』にある文章を考察したい。これはコールリッジが1798年から翌年にかけて滞在したドイツでの出来事を記述したものの中にある。

…above all, I was struck with the profusion of windows, so large and so many, that the houses look all glass. Mr. Pitt’s window Tax, with its’ pretty little additionals sprouting out from it like young toadlets on the back of a Surinam toad, would certainly improve the appearance of the Hamburg houses, which have a slight summer look, not *in keeping* with their size, incongruous with the climate, and precluding that feeling of

retirement and self-content, which one wishes to associate with a house in a noisy city. . . (*Friend,* 2: 212)[19]

なによりも、私は窓が豊富にあることに驚いた。あまりに大きくたくさんあるので、家がすべてガラスのように見える。ピット氏の窓税は、スリナムカエルの背中にいる子どものカエルたちのようにとんでもない小さな追加物をそこから発生させたが、確かにハンブルクの家々の外見を改良するだろう。それらの家々はいささか夏の様子であって、大きさとつりあっておらず、気候とも調和せず、人が騒々しい街にある家にはそうあってほしいと願う隠棲し自足満足するあの感覚を排除してしまう・・・。

ハンブルクの家の窓は、その家の大きさに不釣り合いなほど、多く取りつけられているので、ピットが導入した窓税があればもっと良くなるだろう、というのが趣旨である。これはイギリスやスコットランドでは窓の数によって税金がかけられたため、税金を逃れるために窓を塞いでなくしてしまう家が多かったことに関連している。つまり、ピットの窓税があればこんな窓だらけの家々から窓がなくなっていいのではないか、という皮肉な表現となっている。ピットは首相に就任してすぐあとの1780年代に、従来からあった窓税を引き上げた。これはもともと贅沢税といえるもので、窓が多いということは裕福であると考えられることから導入されたものである。日光と新鮮な空気を奪うこの税金の評判が悪かったことは言うまでもないが、その後この税の他にも戦費を賄うために次々とさまざまな税が生み出されることになる。コールリッジが「とんでもない小さな追加物」と言及しているのは、その後次々と現れた税を指していると考えられる。帽子税（hat tax)、髪粉税（hair powder tax）など、裕福な人々の余剰分から徴収する贅沢税と考えられるものもあったが、印刷物や本の材料である紙への課税も引き上げられ、所得税（income tax）の導入も行われた[20]。紙への課税は、コールリッジのように定期刊行物の出版を考える者にとっては身近なものである。戦争と同時にインフレが起こり、財政の悪化とともに税金も高くなっていったのであるが、その政府の窓税から始まる税の課し方が、驚くように子どもを沢山、普通は考えられないような場所から生み出してくる、‘Surinam toad’ にたとえられているわけである。

コールリッジの思考が ‘Surinam toad’ にたとえられるのであれば、それは生産的でかつ、その産出の仕方がいささか奇想天外で何故そうなのか良く分からないという自己分析が伴っている。この状態はそのまま、ピットの窓税に代表される各種の税を、‘Surinam toad’ が子どもを背中から生み出すところにたとえるところにも踏襲されている。窓税の場合は、主体がイギリス政府ということになるだろうか。

もう一つ同時期に書かれたものを紹介する。ジョン・ダン（John Donne）詩集へのマージナリアにあるものである。

The Truth of Christ, like the Peace of Christ, passeth *all Understanding*. If ever there was a mischievous misuse of words, the confusion of the terms, Reason and Understanding, Ideas and Notions or Conceptions, is most mischievous, a Surinam Toad with a swarm of Toadlilngs sprouting out of its Back and Sides!(*CM*, 2: 296)[21]

キリストの真理は、キリストの平和と同じように、すべての理解を通り抜ける。もしも惑わされやすい間違った言葉の使用というのがかつてあったとすれば、理性と悟性、理念と観念もしくは概念の用語の混乱はもっとも人を惑わすものであって、それは背中や脇から湧き出す子ガエルと伴にいるスリナムのカエルだ。

コールリッジによれば、信仰は理性（“Reason”）によって成るものであり、理性の働きは正しく悟性（“Understanding”）の働きと識別されなければならない[22]。このメタファーの使用例においては、理性と悟性の識別をせずすべて ‘understanding’ として理解してしまうところに見られる言葉の誤用の結果が、“mischievous”－人を惑わすものと考えられている。コールリッジは理性と悟性の識別をカントから学んだが、この識別は人間の思考の形態を理解し人間性についての正しい認識を得るために必要なものであるとして重要視した[23]。理性は人間だけが持つ高次の能力であり、神を知り、観念的な事項を捉え、それらを現実化して認識へと導く力である。悟性は、物事の因果関係や関連性などを一つ一つ理解していく能力であって、理性と悟性はそれぞれ互いに助け合いながら調和的に働かなければならない[24]。この理性と悟性の用語の混乱は ‘Surinam toad’ の子ガエルを産む生態と似たものであるというコールリッジの見解は、神への信仰における人間精神の働きを正しく伝えない人を惑わす言説が多いという批判としても読むことができる。

3．発展するメタファー

コールリッジが晩年までこのメタファーを口にしていたことは、残された談話からも明らかであるが[25]、長くこのメタファーを使う間に、その含意に変化が起こって

いる時期がある。1819年３月のノートの次の記載には、‘Surinam toad’が登場するが、それまでのニュアンスとは違った意味合いを読み取ることができる。

Atoms.－If understood and employed as xyz in Algebra, and for the purpose of scientific Calculus, as in elemental Chemistry, I see no objection to the ~~assumption~~ Fiction not overweighed by its technical utility. But if they are asserted as real and existent, the Suffction （for it would be too complimentary to call it a Supposition） is such and so fruitful an absurdity that I can only compare it to a Surinam Toad crawling on with a *watery* of Toadlets on its back, at every fresh step a fresh Tadpole. （*CN*, 4: 4518）

原子―もし代数学の変数xyzのように理解され用いられるのであれば、そして初等化学におけるように科学上の計算の目的であれば、その技術的有用さにさほど重きを置かれていない虚構としてみるなら異論はない。しかしもし原子が現実に存在するものと断言されるのであれば、（それを仮説と呼ぶにはあまりにも媚びへつらったことになるだろうから）この副次的虚構は大変生産的で不条理であり、私はそれをスリナムのカエルに比べることができるだけだ。水っぽい子ガエルたちを背中に乗せて這い歩き、新しい一歩が新しい子ガエル生み出すというやつだ。

コールリッジが原子論について批判的であったことは、彼の他の著作を見ても分かる[26]。ここでの議論の全体は、エーテル仮説について掘り下げる必要があるため、本論では詳しく取り上げないが、メタファーの理解において重要であるのは次の点である[27]。‘Surinam toad’のメタファーを説明する言葉として､コールリッジは“fruitful”という語と“absurdity”という語を用いていることから、多産であることと、不条理であることが同時存在しているのが原子を語る際のこのメタファーの要点となっている。次にこのメタファーの使い方において、‘Surinam toad’にたとえられるもの、すなわち原子論が、それ自体の存在を肯定されていない、もしくは明確に限定的な意味においてのみ存在可能とされていることである。ここで考えたいのは、これまで考察したメタファーにおいて、自分自身の思考やピットの窓税は「不条理」であり、その存在そのものが限定的にしか許されないものだったのだろうかという点である。少なくとも、自己分析によって捉えた自分の思考形態や、戦費調達のための窓税やその他の課税について、それらが存在し生み出されること自体をコールリッジが不条理と思い疑念を抱いていたとは考えにくい。むしろ生み出されるプロセスの奇妙さと生産物の多さといった点が焦点になっている。それが1819年にノートブックに書かれたメタファーでは、原子論が化学上の計算手法の一つとして利用されるのではなく、原子が現実に存在すると主張されるのであれば不条理だと述べられ、そのように考える仮説は‘Surinam toad’のようだと述べられているのである。つまりここで‘Surinam toad’が示す概念カテゴリーには、その存在が不条理であり、存在しえたとしても仮説的なものでしかありえないという点が含まれていることになる。

このようなメタファーの含意の変化に影響したものとして、医師ジョン・アバネシー（John Abernethy）の講演録の記述にコールリッジが影響を受けたことが可能性として考えられる。アバネシーは著名な医者で、当時は同じ医者のウィリアム・ローレンス（William Lawrence）とジョン・ハンター（John Hunter）の生命論をどのように解釈するかについて論議を繰り広げていた[28]。コールリッジは、生命の原理の存するところを物質機構を超えたものに見る生気論を唱えるアバネシーに共感し、講義録を読み、実際にアバネシーとも交流していたことが知られている。以下にあげるのは、1817年の講演録にあるもので、コールリッジも詳細に目を通したものである。

The Pipa or Surinam toad excludes its eggs like other animals of the same kind, yet the young toads become afterwards lodged in separate cells on its back. The pouches of marsupial animals are permanent, and they suckle their young, but there are no cells in the back of the Pipa during its unimpregnated state, nor do these cells appear to secrete any thing; neither have they any communication with their interior of the animal; all which circumstances Mr. Hunter took much pains to examine and display. Why this great toad should differ in this manner from others of the same kind, how the cells are formed, or the young get into them, is not I believe known. . . .
（Abernethy, 317-18）

ピパ、もしくはスリナム・カエルは、同種の他の生物と同じように卵を放出するが、子どもガエルはそのあと背中の各々独立した小房に収容される。有袋類の袋は常にあるものでそこで授乳するが、受胎時期でないピパの背中には小房はなく、小房が何かを分泌しているようには見えず、またこの生物の内臓と何らかの連絡があるということもない。すべてこれらの状況をハンター氏は検

討し例示するのに非常に骨を折った。なぜこの立派なカエルがこの点においてほかの同種の生物と違わなければならないのか、どのようにして小房ができるのか、また子ガエルがそこに入るのかは知られていないと私は信じる。

この記述は、‘Surinam toad’ の孵化器官を解剖学的に分析しているものであるが、注目すべきは幼生が埋まっている親の背中と、親の内臓器官とに何ら内的な連絡がない、という研究の結果である。この記述から考えられることは、メスの体からの出産は、母体として子を育んでいるという一般的に考えられる形ではなく、単にメスの背中を産卵場所として選んでいるに過ぎないということになる。それが砂の中でも、藻草の間でもよいわけであるが、このカエルにおいては何故かメスの背中なのである。これも親子関係と比喩的に考えれば、いかにも奇妙な形態である。アバネシーの記述からは、当時の医学知識から解剖学的に見た場合、この種の生物に通常ありうる状態からは逸脱した形態であると理解されているのが分かる。

‘Surinam toad’ の生態をアバネシーに沿って理解すれば、親と子という関係に内的結びつきがないもの、ということのアナロジーとなりうる。ここで先の原子論におけるメタファーに戻れば、原子に物質の根本を見ることは、生み出した力と生み出された物質世界との関係を、あたかも ‘Surinam toad’ のように、内的関係の無いものにしてしまうとコールリッジは考えていると解釈できる。というのも、親と子という関係からのアナロジーで見れば、親が神の力であれば、それによって生み出された子どもは物質界の力であり、そうであればその力を基本原理として物資界は研究されるべきであるということになるだろう。それに対して、原子が物質を構成するものの基本的原理を示すと考えると、物質界を生成したものが力（コールリッジにおいては究極的な意味では神の力）であるのに対して、生み出されたものが異なった性質のものとなってしまうことになる。コールリッジはデイビーと同じく、物質界を統一するものとしての力を考えていた[29]。この物質界は「力」から成立しているのであって、これは原子を結ぶ力でもあり、重力でもある、と考えたのである。このように力を基本原理として考えるところに、コールリッジには創世記に描かれた神による物質界の生成とのつながりを見ることができると思われたのではないか。そう考えれば、当時の原子論が、コールリッジにとっては物質世界の本質を捉えたものとは考えられなかったことも理解できるのである。

最後に、カトリック解放法案[30] を ‘Surinam toad’ であると述べたコールリッジの談話について考察する。1834年6月14日に記録されたもので、この場合のメタファーの鍵となる言葉は “unprincipled” である。

The Roman Catholic Emancipation Act－ carried in the unprincipled manner it was－was in effect a Surinam toad, and the Reform Bill and the Dissenter’s admission, and attacks on the Church are so many toadlets one after another detaching themselves from their parent. （*TT*, 1: 484-85）

ローマカトリック解放法案は、非原理的なやり方で導入されたが、実際スリナムのカエルだった。そして改革議案も、非国教会徒の入学許可も、国教会への攻撃も、その親から次々と放たれた子ガエルたちなのだ。[31]

コールリッジはイギリス政府がとった一連のカトリック解放政策が、アイルランドの人々を真に「解放」するものであるとは考えていない。不完全なカトリック解放政策の実行に付随して、他の法案や運動が次々と生み出されているさまを、‘Surinam toad’ にたとえていると考えられる。これまでカトリックの人々は公職に就くことができないなどの社会的制約があったが、この法案によってこれらの制約が緩和された。それとは別に、ケンブリッジ大学では非国教会徒にも大学入学を許可すべきだという動きが出てくる。また、カトリック解放政策の導入と時期を同じくして、より多くの人々に選挙権を与え、腐敗選挙区を整理するという法案が可決され、それに追随して世俗化を進めた形になった国教会に対する内部からの非難が起こっていた。

コールリッジは『タイムズ』（*The Times*）誌のカトリック解放法案についての論説を分析し、ローマ・カトリック教会がアイルランドで支配的な勢力を持つということ以外のことであれば、何でも論じてあると述べている（*TT*, 1:485-86）。これは、アイルランドの人々の解放を考えるのであれば、もともとカトリックの国であったアイルランドが国教会の国であるイギリスの支配を受けることなくカトリック国として独立することもその視野に入らなければならないのに、実際はそうではないということを指摘している[32]。イギリス政府の導入したカトリック解放法案はその存在に疑義の生じるものであり、非原理的であり、同時に次々と原理的にはつながっていないが一見関連があるようなさまざまな宗教的、政治的動きを引き出していく―これを、コールリッジは ‘Surinam toad’ だと述べたのである。

以上、コールリジの ‘Surinam toad’ のメタファーを

検討した。これまでの研究では、コールリッジの‘Surinam toad’のメタファーにどのような含意があるのか、またメタファーの修辞的機能以上のものはあるのか、というような点について意識的に考察されてこなかったといえる。本論では、‘Surinam toad’のメタファーが生み出された背景から、その創作と使用のプロセス、概念の形成と発展について考察したが、コールリッジの‘Surinam toad’のメタファーには、論理的な分析や批判的思考が強く関係していることは明らかである。彼の独自のメタファーを含む言説を分析する際に、どの程度抽象的概念や論理的思考との相関性があると考えればよいかが課題となるところである。

コールリッジが‘Surinam toad’を持ち出して語った事項は、自分自身の思考の生成の様子をたとえたものを除けば、政治、経済、科学理論など、思想的に深くかかわったと考えられるものばかりである。ウィリアム・ピットの政治、理性と悟性の識別、原子論、カトリック解放政策、そしてスリナムにおける植民地統治－これらのトピックはコールリッジにとって常に問題意識とともに考察されたものであり、かつ同時代批評を含むものである[33]。科学から宗教まで、植民地政策からアイルランド問題まで、コールリッジの問題意識において‘Surinam toad’のメタファーに共通している点は、原理的な基盤がどこにあるか分からない状況で、多くのものが生み出されているような事態であるということだろう。そして生み出す主体となるものと、生み出されたものとの関係を、‘Surinam toad’のたとえによって示そうとしているのである。多様な状況の中に一つの共通した要素を見出すことは、それ自体物事の論理化であるが、コールリッジのこのメタファーの使用にも、不条理性という論理とは相容れないものを包括しながら、一つの種類の現象として把握しようとしている。これは、修辞を凝らすことであると同時に、哲学的な試みであると解釈することもできる。

またこのメタファーは、当時のイギリスにおいてリアリティを持った主題に対して、普段日常的に共存してはいない生物を用いるものである。このメタファーに喚起力があるとすれば、それはイギリス社会という内部と、‘Surinam toad’という名とともに喚起されるギアナ地方という外部とを、一瞬にして同時認識させる言説であるからだろう。ここにあるのはスリナム地方やそこに住む人々、気候、文化などに対する批判ではない。批判の矛先は、文明化しているとおそらく自ら思って疑わないイギリスの人々に対してである。

コールリッジが‘Surinam toad’のメタファーを長い期間使用し続けた背景には、次から次へと生み出される現象の中に、不条理で人を惑わすものが横たわっていることがあると感じているからだと考えられる。そして、そのように物事を生み出している原動力は何かといえば、どの場合でもそれは人間の思考であり、社会に集う人々の意欲が集合的に表現されたものと考えられるのである。‘Surinam toad’のメタファーを好んで使い続けるコールリッジには、人間の思考の根底に深く不条理が横たわっていることを感じるところがあったのではないかと推測しうる。そしてそれは、人間の実存そのものに対する哲学的考察の一端としても理解することができるのである。コールリッジが人間の実存に対してどのような哲学を抱いていたかを考えるとき、それは決して散文で説明されうるものばかりではなく、‘Surinam toad’のメタファーにも隠されていると言えるのではないだろうか。メタファーは論理的な思考を形成する思考のプロセスを担うもののひとつであり、コールリッジはこのメタファーの力を最大限に生かして独自の哲学を掘り下げようとしていたのだとすれば、メタファーに存する哲学をすくいあげることがコールリッジの理解に資するものであることは確かだといえるだろう。

注

[1] 本稿で「メタファー」とは、たとえるものと、たとえられるものが類似によって連結している表現と広く考える。たとえるものが示す概念カテゴリーによって、たとえられるものとの類似が示されるので、たとえるものの概念カテゴリーと、たとえられるものが直接指示するものとが同時に示される二重構造となる。本稿の場合、‘Surinam toad’がたとえるものであり、このカエルの現実の生態から導き出された概念カテゴリーにおいて、たとえられるものとの類似が指示され、そこにメタファーが形成されるということになる。メタファー概念の構造については、Sam Glucksberg, “How Metaphors Create Categories－quickly,” Gibbs, 67-73 参照。

[2] よく知られるものに、イオニアン・ハープ（Eolian harp）や腹話術師(ventriloquist）を用いたものがある。イオニアンハープについては拙稿「コールリッジとイオニアのハープ―心のメタファーの発展」を、腹話術師については*BL*, 1: 164を参照のこと。

[3] ‘Surinam toad’は、Pipaもしくは Pipa Pipa とも記載され、和名ではコモリガエル、ヒラタピパという。日本では飼育例が少なく、和名もあまり定着していないと考えられるため、本稿では‘Surinam toad’とアルファベット単数表記で統一する。

[4] とはいえ、このメタファーについての言及はしばしば見受けられ、例えばLowes, 285; Redfield, 109; Woolf, 116などがある。

[5] Johnsonは、科学論文にも、それとは意識されない形でメタファーが利用されていると指摘している(Gibbs, 50-51)。

[6] 1791年に英訳が出版されたビュフォンの『博物誌』には、次のような記載がある。スリナムのカエルのメスの産卵から子カエルの孵化までが詳細に述べられている。“This animal is in form more hideous than even the common toad: the body is flat and broad: the head is small . . . : the back, which is very broad, is of a lightish grey, and seems covered over with a number of small eyes, which are round, and placed at nearly equal distances: these eyes are very different from what they seem: they are the animal' s eggs covered with their shells, and placed there for hatching: these eggs are buried deep in the skin, and in the beginning of incubation but just appear; and are very visible when the young animal is about to burst from its confinement. They are of a reddish, shining yellow colour; and the spaces between them are full of small warts not unlike pearls. In this manner the papal[sic] is seen travelling with her wondrous family on her back, in all the different stages of maturity. Some of the strange progeny, not yet come to sufficient perfection, appear quite torpid, and as yet without life in the egg. Others seem just beginning to rise through the skin; here peeping forth from the shell; and there, having entirely forsaken their prison. Some are sporting at large upon the parent's back: and others descending to the ground, to try their own fortune below”(Buffon, 65). リンネの動植物辞典の英訳にも、‘Surinam toad’ の記載がある（Linné, 648)。

[7] スリナムの現在のアルファベット表記は ‘Suriname’ であるが、19世紀初頭の英語圏では一般的に ‘Surinam’ と表記された。本稿ではコールリッジのテキストで使用されている ‘Surinam’ の表記を採用する。

[8] ナポレオン戦争によるフランスのオランダ併合やその後のナポレオン失脚などの中で、次々とギアナ地方の統治者が移り変わるという事態の中、イギリスは1799年にスリナムを占領したが、1816年に西側の英領ギアナを手に入れる代わりに、オランダにスリナムを返還した。コールリッジの ‘Surinam toad’ のメタファーは、イギリスのスリナム統治時代からオランダへの返還後までの間に書き残されている。

[9] “It is the most hideous of all creatures upon earth, covered over with a dark brown scrofulous skin, very uneven, and marked with irregular black spots; the hinder feet of the creature are webbed, and the toes longer than those before; thus it can both swim and leap like a frog, in which it differs from other toads. Its size is often larger than a common *duck* when plucked and pinioned; and its croaking, which takes place generally in the night, inconceivably loud. But what is most remarkable in this monster, is the manner of its propagation: the young ones being hatched till they become tadpoles in a kind of watery cells on the back of the mother, in which the embrio' s[*sic*] existence first commences; for on the back she is impregnated by the male, and thence issues this most extraordinary birth”(270). ステッドマンはこの箇所の原稿に“these Eggs are deposited in Scrufulous Ovari or cells to a considerable number on the females back”(Price, *Narrative*, 210-11)と書いており、メスの背中にオスが卵を埋め込むという彼の観察は、現地で繁殖状態を間近に見ていることを示している。（後出のアバネシーからの引用を参照。）また、ステッドマンはこのカエルは人に慣れ、上官がペットにしていたこと、また現地の人々は食用にするが味気なくて不味いことなどを記述している。

[10] コールリッジがNarrative を初めて読んだ時期は特定できないが、少なくとも1799年には確実に読んでいる（*CL*,1:535参照)。出版者のJoseph Johnsonとは交流があったため、出版された1796年よりも早い時期に、ステッドマンの原稿を見ている可能性も指摘されている（*CN*, 1: 124)。ただし、コールリッジがステッドマンやこの本に直接言及したものは筆者の知る限り少ない。

[11] サザビーはChristoph Martin Wieland の叙事詩*Oberon*(1780)の翻訳で知られている。その後、ヴェルギリウスやホーマーの翻訳を残した。コールリッジとは古くからの知人である。

[12] 同様の記述は、友人のHenry Crabb Robinsonも記録している。*CL*, 3: 95n参照。ヴァージニア・ウルフはコールリッジの娘セアラを記述する際にこのメタファーを使っている（102)。最近のBBCの記事にも言及が見られる。“Story is embedded in story, story sprouts out of the midst of story, like the Surinam toads out of the back of their mother toad, which Coleridge used as a metaphor for his unruly imagination”(BBC Today, 2008).

[13] 体の脇から子どもが生まれることは ‘Surinam toad’ の場合にはない。これはコールリッジがこのカエルの生態について不正確な記事を読んだか、もしくは自分なりのイメージを膨らませているかである。

[14] “I lay too many Eggs in the hot Sands with Ostrich Carelessness & Ostrich oblivion”(*CL*, 2: 1011).ダチョウのメタファーは、ダチョウの生態から、自分の考えたことに対する注意がすぐ散漫になってしまうことをたとえているのであるが、1802年ごろから繰り返し登場するものの、自分自身をたとえる以外の他の場合に用いられることはほとんど見当たらない。また、自分が生んだ卵は踏みつぶされるか、そうでなければ育って他の誰かの羽飾りになっているとも述べているが、これは自分の考えが実現不可能になったり、人に盗まれたりすることをたとえたものである。このメタファーの最も早い例のひとつは、1802年のノートブックである。*CN*, 2: 1248.その他、*BL*, 1: 46, *CL*, 3:126.など。

[15] 書評の仕事に加えて、連続公演では文学をテーマにしたものとともに教育論についての追加講演を行っている。また、定期刊行

物（*The Friend*）の発行もこの時期から具体的に企画している。*Friend, 1: xxxv-xxxix; Lectures,* 1: 96-109参照。

[16] ステッドマンの記述によるスリナム地方の屍肉を漁るハゲタカ（“vultures”）については、サウジー宛ての手紙に引用している。*CL*,1: 535および*CN*, 1: 124, 124n参照。

[17] William Hazlittによる書評である。*Coleridge: The Critical Heritage,* 295-324参照。

[18] コールリッジは次のように述べている。“It is not, indeed, the least delightful impression left on our mind by these volumes, that we rise with a faith in the goodness of many of those whom we have been accustomed to contemplate chiefly as *great* and *powerful*; and feel the asperity of party prejudices die away when we find, that, where the cause of justice, and the liberation of the oppressed, call forth their efforts, so many political opponents felt no rivalry but that of zealous exertion n the same good cause”（*Shorter Works,* 1: 228）.

[19] 句読点等の若干の変更を伴って、この部分はそのまま1817年発行の『文学的自叙伝』に採録された（*BL*, 2: 178, および2:160n参照）。

[20] Montgomeryは、1830年代までにイギリスで導入された税を総括しているが、窓税からの税収は、ピットの時代にそれまでより倍増し、1817年に『文学的自叙伝』が出版された時期に至っても、税収の総額はほぼ増加しつづけている（70）。紙への課税からの税収も急激に増加しており、紙製品を扱うあらゆる業者に影響した（92-94）。ちなみに、イギリスにおける所得税はピットが初めて導入した。

[21] これは1811年ごろに書かれたものである。

[22] “Ideas and Notions or Conceptions”の識別については*OM*, 20-21参照。

[23] コールリッジの理性と悟性の働きに関する最もまとまった考察は*Friend,* 1: 154-61にある。

[24] この二つの能力の識別は、当時のイギリスの言論界で一般的に受け入れられてきたものではなかった。むしろ、当時広く受け入れられていたスコットランド啓蒙学派の思想は、こういったドイツ経由の思想の傾向とは相いれなかった。Jackson, 8-11参照。

[25] *TT*, 1: 484-85, 485n参照。最も晩年のものは、1834年6月30日に記録されている。

[26] *AR*, 399-400参照。当時の原子論はドルトンの理論に代表されるものである。現在から見ると、物質の体積比などを割り出すための基礎的な考え方を示すものであり、分子構造は明らかにされていない。

[27] コールリッジがここで原子論に対して否定的であるのは、原子論が物質界の基本原理を示すとは考えられないことによるが、引用した部分に続くノートブックの記載によれば、その理由は次のようなものである。物質が空間を占めているということは、原子は単一では存在しえず、必ず複数あり、それぞれの原子は何かによってお互いつながらなければならない。原子をつなぐものとして微細な粒子であるエーテルがよく仮定されるが、原子論を基本として物質の原理を考えると、エーテルの微細な粒子をつなぐものが何であるのかをさらに追い求めねばならず、そういったことは‘Surinam toad’が背中から子どもを生み出すように、またその子どもが母体とは直接的な連結をもたないように、本質的でない付随的な仮説や理論を生産するだけである―。ちなみに、19世紀の科学研究においての広義のエーテル仮説は、現代における電磁気学、光学などの分野で、原理的に解明されていない物質や性質を説明する際に採用されていた。Bynum, 7-8参照。

[28] この生命論議についての概略は、*Shorter Works,* 1: 481-84; *CN*, 3: 4357n参照。アバネシーの‘Surinam toad’についての言及およびコールリッジとの関係については、*CN*, 4: 4518n参照。

[29] コールリッジのメタ・サイエンスの思想によれば、物質世界を構成する二つの極は重力と光により成立し、光とは“modifying actualizing Power”である（*CL*, 3:772）。デイビー については、Knight, 76-77および*CL*, 3: 38参照。

[30] 1829年の ‘Roman Catholic Relief Act’のことを指している。この法案の成立に至る経過については、*C&S*, xxxvii-xl, xlix-liを参照。

[31] “The Reform Bill”とは国民代表法（The Representation of the People Act, 1832）のことで、選挙法の改正が主な目的である。ケンブリッジ大学における非国教会徒の入学許可運動に関してのコールリッジのコメントは、*TT*, 1:475, 475nを参照。「国教会への攻撃」はその後オックスフォード運動として展開し、カトリックへの回帰運動にも発展した。

[32] コールリッジはイングランドのアイルランド政策への強い批判を口にしている。“The connection of Ireland with England has been from first to last a source of unqualified evil and weakness to England; the soldiers and sailors obtained from Ireland might have been obtained, and better, in England and Scotland, and their whole number has been required to keep Ireland itself in that sort of murderous armistice in which, for the most part, it has ever been”（*TT*, 1: 246）.

[33] ロマン主義の時代の植民地統治や奴隷貿易に関しては、Lee, 9-28に概略がある。

<Abbreviations>

BL: Coleridge, *Biographia Literaria*
CL: Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge
CN: The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge
C&S: Coleridge *On the Constitution of the Church and State*
Lectures 1808-1819: Coleridge, *Lectures 1808-1819 On Literature.*
Friend: Coleridge, *The Friend*
OM: Coleridge, *Opus Maximum*
Shorter Works: Coleridge, *Shorter Works and Fragments*

TT: Coleridge, *Table Talk*

＜参考文献＞

Abernethy, John. *Physiological Lectures*. 1817; London, 1821.

Buffon, M. De. *The System of Natural History*. 2vols. Edinburgh, 1800.

Bynum, W. F. et. al. (ed.). *Macmillan Dictionary of the History of Science*. London: Macmillan, 1981.

Coleridge, Samuel Taylor. *Aids to Reflection*. Ed. John Beer. Collected Works vol. 9. Princeton: Princeton University Press, 1993.

---. *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and Walter Jackson Bate. *Collected Works*. vol.7 2vols. Princeton: Princeton University Press, 1983.

---. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6vols. Oxford: Clarendon Press, 1956-71.

---. *The Friend*. Ed. Barbara E. Rooke. *Collected Works* vol. 4. 2vols. Princeton: Princeton University Press, 1969.

---. *Lectures 1795 On Politics and Religion*. Ed. Lewis Patton and Peter Mann. *Collected Works*. vol. 1. Princeton: Princeton University Press, 1971.

---. *Lectures 1808-1819 On Literature*. Ed. R. A. Foakes. *Collected Works* vol. 5. 2vols. Princeton: Princeton University Press, 1987.

---. *Lectures 1818-1819 On the History of Philosophy*. Ed. J. R. De J. Jackson. *Collected Works* vol. 8. 2vols. Princeton: Princeton University Press, 2000.

---. *Marginalia* Ed. H. J. Jackson and George Whalley. *Collected Works*. vol. 12. 6 vols. Princeton: Princeton University Press, 1980-2002.

---. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Kathleen Coburn, et al. 5vols. Princeton :Princeton University Press, 1957-2002.

---. *Opus Maximum*. Ed. Thomas McFarland. *Collected Works,* vol. 15. Princeton: Princeton University Press, 2002.

---. *On the Constitution of the Church and State. Ed. John Colmer. Collected Works,* vol. 10. Princeton: Princeton University Press, 1976.

---. *Shorter Works and Fragments*. Ed. H. J. Jackson and J. R. de Jackson. *Collected Works*. vol. 11, 2vols.

---. *Table Talk*. Ed. Carl Woodring. *Collected Works*. vol. 14. 2vols. Princeton: Princeton University Press, 1990.

Davy, Humphry . *Collected Works of Sir Humphry Davy*. Ed. John Davy. 9vols. 1839-40. Bristol: Thoemmes Press, 2001.

Gibbs, Raymond W. (ed.). *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*. New York: Cambridge University Press, 2008.

Jackson, J. R. de J. *Coleridge: The Critical Heritage*. New York: Barnes & Noble, 1970.

Keane, Patrick J. *Coleridge's Submerged Politics: The Ancient Mariner and Robinson Crusoe*. Missouri: University of Missouri Press, 1994.

Kittay, Eva Feder. *Metaphor: Its Cognitive Force and linguistic Structure*. Oxford: Clarendon Press, 1989.

Knight, David. *Humphry Davy: Science and Power*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.

Lacoff, George and Mark *Johnson. Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press, 1980.

---. *Philosophy in the Flesh: the Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books, 1999.

Lee, Debbie. *Slavery and the Romantic Imagination*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press, 2004.

Linné, Carl Von. *A General System of Nature, through the Three Grand Kingdoms of Animals, Vegetables, and Minerals, Systematically Divided into Their Several Classes, Orders, Genera, Species and Varieties, with Their Habitations, Manners, Economy, Structure, and Peculiarities*. Vol. 1. London, 1806.

Lowes, John Livingston. *The Road to Xanadu*. 1927: Princeton: Princeton University Press, 1986

Montgomery, Martin, R. *Taxation of the British Empire*. London: 1833.

Perkins, David. *A History of Modern Poetry: Modernism and After*. Cambridge and London: Belknap Press of Harvard University Press, 1987.

Price, Richard and Sally Price (eds.) . *Narrative of a Five Years Expedition against the Revolted Negros of Surinam: Transcribed for the First Time from the Original 1790 Manuscript*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1988.

---. *Stedman's Surinam: Life in an Eighteenth-Century Slave Society*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1992.

Redfield, Jamison Kay. *Touched with Fire: Manic-Depressive Illness and the Artistic Temperament*. New York: Free Press Paperbacks, 1993.

Sacks, Sheldon (ed.). *On Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press, 1978.

Searle, John R. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press, 1979.

Stedman, John. *Narrative of a Five Years' Expedition, against the Revolted Negroes of Surinam, in Guiana, on the Wild Coast of South America; from the Year 1772 to 1777*. 2vols. London, 1813

Woolf, Virginia. *The Death of the Moth: and Other Essays*. Harmondsworth: Penguin Books, 1961.

"Inspiring, 1,001 storytellers." BBC Today. Friday, 28 November 2008.
http://news.bbc.co.uk/today/hi/today/newsid_7751000/7751299.stm 20100922

石倉和佳　「コールリッジとイオニアのハープ：心のメタファーの発展」『論叢』（長崎外国語短期大学）　56（2001）：19-33

（平成22年９月24日受付）